
男爵閣下の本音

壱条つづら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男爵閣下の本音

【Nコード】

N5402C

【作者名】

き条つづら

【あらすじ】

ブルムクヴィスト共和国クレメンテ地方領主レナート・ダレツシオ。彼が思うこととは。……そして伯爵令嬢はなかなかするどい。

「ではよろしいですか？」
「うむ、彼に書状を送ってくれ」
国王は大臣に向かって頷いた。

ブルムクヴィスト共和国首都ブルムダールより馬を走らせ二日、馬車なら三日。潮風の吹き込む書斎で公文書に調印をしている青年こそがレナート・ダレッツシオ男爵、このクレメンテ地方の領主である。

窓の外から聞こえてくる波の音に混じって廊下を走る足音を聞き、彼は手を止めた。

「カストル、あいつか？」

「はい。おそらくフェリシテ様でしょう」

傍らに控える黒髪黒眼の少年がにっこりと笑った。

「そうか」

レナートは木で出来た立派な扉を見やる。と同時にその扉が勢いよく開かれ、一人の少女が入ってきた。

「レナート、聞いたわよ！ 首都に栄転するんですってね。おめでとぅ」

彼女の名前はフェリシテ・バディオーリ。バディオーリ伯爵の一人娘だ。

「ああ、その話なら断った」

「なんで!？」

あっさり言い放つレナートに、フェリシテは詰め寄った。首都への栄転は地方貴族にとって大変名誉なことであり、通常断る者などない。

「俺はこの土地が好きだからな。まだここに居たいのだ」

一際強い風が吹き込み部屋中に潮の香りが広がった。

「……嘘臭いわ」

事実八割方は嘘だ。確かにこの土地が好きだというのは本当だが、それはただの言い訳に過ぎない。若いうちの出世には暗殺という危険がつきまとう。現在二十代前半、まだ命が惜しい。

「失敬な。本当だよ」

怪訝な顔をするフェリシテにレナートはそう言った。二割はね、と心の中で付け足しながら。

彼の他に唯一事の真相を知るカストルはただ黙って微笑んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5402c/>

男爵閣下の本音

2010年12月3日14時38分発行